

事業区分	経常研究(基盤・応用)	研究期間	平成25～29年度	評価区分	事前評価
研究テーマ名 (副題)	養殖貝類の優良・高品質化を目指した基盤技術の開発 マガキ高品質種苗の作出,生産効率の向上,高品質真珠の作出				
主管の機関・科(研究室)名	研究代表者名	総合水産試験場 介藻類科 大橋智志 岩永俊介			

<県総合計画等での位置づけ>

長崎県総合計画	基本理念 産業が輝く長崎県 政策 4. 力強く豊かな農林水産業を育てる 施策 (4)収益性の高い、安定した漁業・養殖業の実現
長崎県科学技術振興ビジョン	基本目標 競争力のある産業により雇用が拡大した社会 2-1産業の基盤を支える施策 (1)力強く豊かな農林水産業を育てるための、農林水産業の安定生産と付加価値向上
長崎県水産業振興基本計画	基本目標 収益性の高い、安定した漁業・養殖業の経営体づくり 基本施策6. 収益性の高い養殖業の育成

1 研究の概要(100文字)

貝類養殖の高度化・収益率向上のため、マガキでは人工種苗の品種改良に有効な親貝の生理指標等の開発と、種苗単価の費用対効果を向上させる効率的な種苗生産技術を開発する。また、価値の高い照りの良い真珠を生産するアコヤガイの特徴を解明するとともに、照りを改善する品種改良や養殖方法等を開発する。	
研究項目	マガキ人工種苗の品種改良に関する親貝生理指標等の開発 マガキ人工種苗の効率的生産技術の開発 照りが良い真珠の生産方法の開発

2 研究の必要性

1) 社会的・経済的背景及びニーズ 本県のマガキ養殖は伸張傾向にあるが、宮城県産種苗に依存しており、夏場の斃死等の弊害を受けている。また、地域特性と優良形質を併せ持つブランド化による差別化による付加価値向上が求められており、費用対効果の点から種苗生産効率の向上による単価軽減が求められている。真珠養殖では、品質の向上がさらに求められており、照りの改善が求められている。
2) 国、他県、市町、民間での実施の状況または実施の可能性 市町村単位での実施は規模的に困難であり、国としては公募事業での対応を検討しているが採択されていない。

3 効率性(研究項目と内容・方法)

研究項目	研究内容・方法	活動指標	H					単位	
			25	26	27	28	29		
	優良マガキ種苗の作出のための生理指標等に関する試験	生理指標等に関する試験	目標	1	1	1	1	1	回
			実績						
	マガキ人工種苗の効率的生産技術の開発	種苗生産・管理技術試験	目標	1	1	1	1	1	回
			実績						
	真珠の照り改善に関する、生産メカニズム、生産方法(品種改良・養殖方法)に関する試験	生産メカニズム・種苗生産・管理技術試験	目標	1	1	1	1	1	回
			実績						
			目標						
			実績						

1) 参加研究機関等の役割分担

予算

研究予算 (千円)	計 (千円)	人件費 (千円)	研究費 (千円)	財源			
				国庫	県債	その他	一財
全体予算	62,500	45,000	17,500				17,500
25年度	12,500	9,000	3,500				3,500
26年度	12,500	9,000	3,500				3,500
27年度	12,500	9,000	3,500				3,500
28年度	12,500	9,000	3,500				3,500
29年度	12,500	9,000	3,500				3,500

過去の年度は実績、当該年度は現計予算、次年度以降は案
人件費は職員人件費の見積額

(研究開発の途中で見直した事項)

4 有効性

研究 項目	成果指標	目標	実績	H	H	H	H	H	得られる成果の補足説明等
				25	26	27	28	29	
	優良種苗の開発に有効な 生理指標等の開発	1						1	高水温期の飼育に有利な種苗の 作出
	種苗単価の軽減に有効な 生産技術の開発	1						1	費用対効果の向上による漁業者 所得の向上
	照りが良い真珠の出現率 を向上するために有効な 方法(品種改良・養殖方 法)の開発	1						1	販売単価の向上

1) 従来技術・先行技術と比較した新規性、優位性

マガキは夏場の高水温に弱く、立地や気候で優位に立つ広島、宮城が寡占しているが、地域特性に応じた品種改良の試みは行われていない。本県はアコヤガイで有効な手段を開拓しており、これらの技術の応用が可能な点で他県に先行している。

種苗生産の効率化に関しては、タイラギ種苗用飼育装置、浮遊幼生用栄養強化剤等の特許を取得しており、他県に対して独自技術を有する。

アコヤガイ真珠の照りの改善は非常に難しいため他県では取組まれておらず新規性が高い。本県は真珠の色彩調整に関する種苗生産技術を開発しており、他県に対して独自技術を有する。

2) 成果の普及

研究成果の社会・経済への還元シナリオ

マガキ 本県独自種苗の開発によって、生産性が向上し、ブランド化が推進される。

種苗の効率的生産によって単価が軽減され収益性が向上する。

アコヤガイ 品質で優位に立つことが可能になり、収益性の向上が期待される

研究成果による社会・経済への波及効果の見込み

マガキ 生産性向上、ブランド化、種苗単価の低減によって生産量の増加・収益率の向上が期待され、生産金額、収益性の両面から漁業者の純利益の向上が見込まれる。

アコヤガイ 収益性が向上することで、漁業集落の雇用が安定し、生産金額も向上する。

(研究開発の途中で見直した事項)

種類	自己評価	研究評価委員会
事前	<p>(24年度) 評価結果 (総合評価段階：A) ・必要性：S マガキおよびアコヤガイ真珠養殖は、県内の貝類養殖において重要な生産対象種であり、下記のとおり研究の必要性は非常に高い。 (マガキ) 本県のマガキ養殖は拡大伸長傾向にあり、今後の水産振興上、重要。ただし、種苗の入手に不安があるとともに、夏場のへい死等が安定生産の阻害要因になっており、養殖業者からは、その解決について強く求められている。本研究の成果により良質な種苗の供給が可能となれば、生産量増加、収益性向上が期待される。 (真珠) 本県は全国トップクラスの真珠の産地であるが、景気低迷の影響により、その経営は非常に厳しい。そのため、養殖業者からは収益性向上のため、価格に大きく影響する「照り」に関する研究を望む声が非常に強い。本研究は本県真珠養殖業の生き残りのためにも喫急の課題である。</p> <p>・効率性：A 漁協や漁業者の協力を得ながら進めるとともに、関係する研究機関等と情報を交換して効率的に進めていく。これまでの研究で上記の連携体制は整っており、各関係者との連携をさらに深めることで、十分な成果を出す可能性は高い。</p> <p>・有効性：A これまでの研究成果を活かした課題解決への取り組みであり、取り組む研究は全国初のものである。本研究で見込まれる成果は、県内の貝類養殖業者の所得向上を図るうえで非常に有効なものである。</p> <p>・総合評価 県内の水産振興を図るうえで、貝類の養殖業者の収益性向上、経営安定に資する重要な課題であり、上記のとおり緊急性、必要性は極めて高い。また、研究推進体制も整っており成果も見込めることから、本研究の実施の意義は大きい。</p>	<p>(24年度) 評価結果 (総合評価段階：A) ・必要性：S マガキ及びアコヤガイ養殖は県内の重要な養殖業であり、健全なマガキ種苗の安定供給や真珠品質の向上のための技術開発は、現場漁業者から求められている。また、本県では宮城県から入手するマガキ種苗の依存度が高いため、県内産種苗を生産するための技術開発が望まれている。</p> <p>・効率性：A これまで開発してきた技術成果を活かした新たな研究事業であり、漁協・漁業者及び研究機関との連絡・協力体制も十分整備された計画であることから効率性は高い。</p> <p>・有効性：A マガキの種苗生産や真珠の品質向上に関する技術開発は、漁業者の所得向上に直結するため有効性は高い。経済面での波及効果の試算も良くできている。</p> <p>・総合評価 漁業者の収益性向上や経営安定化につながる技術開発であり、その成果に期待したい。これまでの研究成果の蓄積が多く、優位性の高い事業であると評価したい。計画通り実施できれば、イノベーション創出に繋がる内容であり、取り組む意義は大きい。</p>
	対応	<p>対応 ご期待に副えるように技術開発を進めていきます。</p>

途 中	(年度) 評価結果 (総合評価段階:) ・必要性 ・効率性 ・有効性 ・総合評価	(年度) 評価結果 (総合評価段階:) ・必要性 ・効率性 ・有効性 ・総合評価
	対応	対応
事 後	(年度) 評価結果 (総合評価段階:) ・必要性 ・効率性 ・有効性 ・総合評価	(年度) 評価結果 (総合評価段階:) ・必要性 ・効率性 ・有効性 ・総合評価
	対応	対応

総合評価の段階

平成20年度以降

(事前評価)

- S = 積極的に推進すべきである
- A = 概ね妥当である
- B = 計画の再検討が必要である
- C = 不相当であり採択すべきでない

(途中評価)

- S = 計画以上の成果をあげており、継続すべきである
- A = 計画どおり進捗しており、継続することは妥当である
- B = 研究費の減額も含め、研究計画等の大幅な見直しが必要である
- C = 研究を中止すべきである

(事後評価)

- S = 計画以上の成果をあげた
- A = 概ね計画を達成した
- B = 一部に成果があった
- C = 成果が認められなかった

平成19年度

(事前評価)

- S = 着実に実施すべき研究
- A = 問題点を解決し、効果的、効率的な実施が求められる研究
- B = 研究内容、計画、推進体制等の見直し求められる研究
- C = 不相当であり採択すべきでない

(途中評価)

- S = 計画を上回る実績を上げており、今後も着実な推進が適当である
- A = 計画達成に向け積極的な推進が必要である
- B = 研究計画等の大幅な見直しが必要である
- C = 研究費の減額又は停止が適当である

(事後評価)

- S = 計画以上の研究の進展があった
- A = 計画どおり研究が進展した
- B = 計画どおりではなかったが一応の進展があった
- C = 十分な進展があったとは言い難い

平成18年度

(事前評価)

- 1: 不相当であり採択すべきでない。
- 2: 大幅な見直しが必要である。
- 3: 一部見直しが必要である。
- 4: 概ね適当であり採択してよい。
- 5: 適当であり是非採択すべきである。

(途中評価)

- 1: 全体的な進捗の遅れ、または今後の成果の可能性も無く、中止すべき。
- 2: 一部を除き、進捗遅れや問題点が多く、大幅な見直しが必要である。
- 3: 一部の進捗遅れ、または問題点があり、一部見直しが必要である。
- 4: 概ね計画どおりであり、このまま推進
- 5: 計画以上の進捗状況であり、このまま推進

(事後評価)

- 1: 計画時の成果が達成できておらず、今後の発展性も見込めない。
- 2: 計画時の成果が一部を除き達成できておらず、発展的な課題の検討にあたっては熟慮が必要である。
- 3: 計画時の成果が一部達成できておらず、発展的な課題の検討については注意が必要である。
- 4: 概ね計画時の成果が得られており、必要であれば発展的な課題の検討も可。
- 5: 計画時以上の成果が得られており、必要により発展的な課題の推進も可。